

科学における多様性に関する フェミニスト科学哲学の主張… 平等主義的多様性と規範的多様性

二 瓶 真理子

1. はじめに

本稿が検討するのは、科学的共同体内部に存在する多様性が、科学的知識の生産にポジティブに貢献するといういみで認知的有益性を持つという主張である。このような主張は、フェミニスト科学哲学者を含む多くの論者に共有されている。しかし、想定されている「多様性」や「認知的有益性」の内実は論者間で異なる。とくに、フェミニスト科学哲学内部の代表的な2つの路線、フェミニスト経験主義とフェミニストスタンドポイントの間での多様性をめぐる相違は、とくにスタンドポイント論者側からしばしば論じられてきた。本稿の目的は、この両者がコミットする「多様性」概念の相違をより明確にすることである。

以下では、まず科学における多様性にかんする近年の動向と、そこで意図されている認知的有益性の意味を確認する。次に、フェミニスト経験主義と、フェミニストスタンドポイントによる多様性に関する議論を

整理する。その上で、ステイラーらによる複数の多様性概念の分析を参照し、両者が依拠する多様性概念の相違をより明確なものとして提示する。両者は、科学的共同体内部で多様であるべき要素ないし属性の「種類」についてではなく、ある集団が多様であるという状態にたいしての概念、つまり多様性概念そのものが異なっている。

2. 科学における多様性と認知的有益性に関する動向

科学内部の多様性をその認知的利益から擁護する議論は、フェミニスト科学哲学に特有のものではない。同種の主張は、科学哲学・社会認識論において、異なる観点から複数提起されている。大きな路線では、科学者共同体内部の認知的分業の議論がある。キッチャーは、ある領域での同一の特定研究テーマに対するプロジェクトの多様性に注目し、異なる複数のプロジェクトに領域内部の研究資源を分散させることで、領域全体にとっての科学的知識の多産性が期待できるとした (Kitcher 1992, 1993)。認知的分業の流れでは、研究領域や科学者共同体内部での意思決定ベクトル (Solomon 2001) ʼ 理論的アプローチ (Zollman 2010) ʼ 「一匹狼」か「追従者」かなどの研究戦略 (Weisberg and Muldoon 2009) ʼ 発見法 (Hong and Page 2004) の多様性の認知的有益性が検討されている (cf. Weisberg 2010)。

認知的分業は科学内部に複数存在する競合プログラムやアプローチの多様性に着目した議論である。これに対して、フェミニスト科学哲学者たちは、科学的共同体のバックグラウンドの多様性に焦点を当ててきた。かれらは、歴史的に科学から排除されてきた女性やマイノリティの科学への参与と包摂を求め、それを可能にする科学者共同体の枠組みや科学的方法論を提起してきた。¹⁾ 同時にかれらは、多様なバックグ

ラウンドを持つ構成員を科学者共同体に含むことの認知的利益も指摘してきた。ただし、どのような多様性をどのような構造で科学的共同体に包摂すべきかは、フェミニスト科学哲学内部でも見解の相違がある。この点は次節で述べる。

先に「認知的 (epistemic)」という語について確認しておく。ダニエル・ステイールは、認知的諸価値 (epistemic values) を外在的／内在的 (extrinsic/intrinsic) なものに区分している⁽²⁾。本稿は、この区分における外在的認知的諸価値も含む広い意味で「認知的」利益という語を使用する。内在的認知的価値とは、科学的理論が「その価値を顕示することが、真理の達成を構成する」ものである。正確な予測は将来の観察可能な現象についての真なる、あるいは近似的に真なる信念形成を可能にするから、「経験的正確性」は内在的な認知的諸価値である。それに対して、「それじたいが真理の指標や要件ではないが、真理の達成を促進するもの」は外在的認知的諸価値とされる。科学的仮説の「テスト可能性」は、それを持つことが仮説の真理を構成するわけではないが、経験的探究の効率を高めるゆえに外在的な認知的諸価値であるとされる (Steel 2010, 19)。「観察可能な現象の真なる予測」を構成するか、または、そのような予測をもたらす科学的知識の生産を促進するものが「認知的」であるのに対し、その目的を妨げるかなんの影響も与えないものが「非認知的」とされる。何らかの諸価値を認知的であると評価することは、科学的実在論を支持するか否かとは中立に可能である。

ステイールは、外在的認知的諸価値の候補として、科学的仮説が持つ性質以外にも、「議論のオープンさ」とか「構成員の多様性」など、方法、科学者共同体の構造、科学実践が持つ規範の性質がありうるとする (Steel 2010, 20)。「認知的」とは、「社会的」と対立するものではない。「認知的諸価値が科学に影響を与え

るためには、科学者共同体の慣習や規範にそれらが組み込まれている必要がある」から、「認知的諸価値と非認知的諸価値は、両者とも典型的には社会的なものでありうる」(Steel 2010, 23)。認知的分業やフェミニスト科学哲学における多様性の議論は、多様性が外在的認知的諸価値として機能するという主張として理解できる。

3. フェミニスト科学哲学における多様性

フェミニスト科学哲学は、おおむね一九八〇年代から発現した。十九世紀末から科学的研究の実践形態、科学者共同体への参与や科学の教育機会における女性の排除や差別、あるいはジェンダー格差は、問題視されてきた。フェミニスト科学哲学は、これらに加え、科学的仮説にかんする推論や証拠の評価といった科学的方法論も含む科学的知識の生産プロセスの全般が、ジェンダー偏見も含む社会的・政治的・歴史的な諸価値の影響下にあると指摘し、価値自由的科学方法論に代わる方法論を模索してきた。

「フェミニスト経験主義 (feminist empiricism : 以下 FE と略記)」と「フェミニストスタンドポイント (feminist standpoint : 以下 FSP と略記)」とは、サンドラ・ハーディングがフェミニスト科学哲学内部の萌芽的アプローチとして言及した立場を起源とする (Harding [1986] 24-26)。本節では、両者が多様性をどのように論じているのかを明らかにする。FSP の代表的論者としては、以下で取り上げるハーディング、ワイリー、インテマンらがいる。FE 側は、以下で取り上げるロンジーノのほか、アンダーソン、コラニーらが挙げられることが多い (e.g. Anderson 2004, Kourany 2010)。FE 内部には異なる複数のアプローチが存在するが (cf. 二瓶 2020)、本稿は、FSP 側から比較検討材料とされることの多いロンジーノによる多様性概念とその

役割をみる。その後、ESPの基本的主張とそこで想定されている多様性について検討する。

3-1. フェミニスト経験主義における多様性

初期フェミニスト科学哲学に対しては、「バイアスパラドクス」として知られる指摘がなされていた。フェミニストたちは、科学的推論に混入する男性主義的偏見を取り除くべきものとして問題視する一方で、フェミニスト的価値観は有意義なものとして科学に取り入れるべきであるとも言う。だが、2つの主張は両立可能なのだろうか (Antony 1994, Rolin 2006)。

ヘレン・ロンジーノが提起する「批判的文脈的经验主義」は、EE路線からのパラドクスの有力な解決策とみなされている。(Longino 1990, 2002)。彼女によれば、科学者が証拠評価や仮説形成のさいの推論は、かれらの自覚の有無にかかわらず、かれらが持つ背景的信念に依存している。背景的信念には、当該領域の他の理論的信念、実験機器の操作等にかんする信念のほか、当該仮説に直接かかわらないような一般的な認知的バイアスや政治的信念、倫理的信念、利害関心、偏見等の文脈的諸価値も含まれる。しかし、推論が文脈的価値負荷的な背景的信念に依存することじたいは、科学者の仕事として否定される根拠にはならない。「文脈的諸価値、利害関心、価値負荷的仮定は、科学の構成的規則「真理、経験的十全性、説明力といった科学の目的に貢献する規則」を犯すことなしに、探究の帰結に影響を及ぼすことが可能である」(Longino 1990, 83)。

ロンジーノによれば、科学者共同体が、提起された仮説や証拠、研究方法や研究結果の解釈等についての相互批判の場の確保、批判にさいしての共有基準、批判への応答可能性の確保、共同体構成員間の知的権威

の調整された平等性というノルム (Longino 1990, 76-18, 2002, 129-131) をある程度満たしている場合には、共同体の構成員が所持する背景的信念は共同体レベルでポジティブに機能する。文脈負荷的な個人レベルの科学的推論は、共同体に提起されることで、複数の他の科学者からの批判的吟味にさらされる。共同体レベルでの相互批判により、個人レベルでの科学的推論に混入した偏見や認知の歪み、あるいは政治的・倫理的信念や利害関心の影響は外部化され批判可能なものとなる。ただし、共同体の相互批判の目的は、すべての文脈的諸価値の除去ではない。悪しき偏見や誤りを導く認知的歪みは除去されるが、共同体の成員間での吟味によりその諸価値が科学的知識を歪めない(科学的構成的規則を犯さない)ことに同意が得られれば、文脈的諸価値の影響も容認される。性差別的偏見やフェミニスト的価値観に限らず、あらゆる文脈的諸価値は、共同体レベルで除去または容認が検討されコントロールされるものである限りで、科学に正統に影響を与えうる。文脈的諸価値が「不在なのではなく、社会的にマネジメントされている状態が、科学の客観性が維持された状態」である (Longino 2002, 50)。価値の社会的マネジメントによって、先のパラドクスを解消した形である。

ここで重視されている「多様性」とはいかなるものか。ロンジーノは、共同体レベルでの文脈的価値のマネジメントを行うさいに、「積極的かつ認知的に効果的な批判的議論を行うためには、観点の多様性 (diversity of perspectives) が必要である」とする (Longino 2002, 131)。共同体内部の個人は自身の価値観や偏見は自覚しにくい、自身と異なる価値観や信念の存在や影響に対してはより敏感でありうる。だから、「所与の共同体内部に含まれる異なる観点の数が大きいほど、科学的実践はより客観的なものになる」 (Longino 1990, 80)。したがって、こゝでの多様性とは、科学者共同体内部に含まれる観点(価値観、利害関心、偏

見なども含む個々人の観点)が、できるだけ多くの数存在し、かつ、できるだけ互いに異なっている状態である。諸観点は、互いに他と異なることにおいて認知的有益性が認められる。互いに異なる価値観を持つことは、共同体内部の諸価値の影響の検知と批判的吟味をより活発にし、科学的探究の客観性の向上に貢献するからである。何らかの特定の観点が、他の観点よりも認知的により有益であるということはない。

3-2. フェミニニストスタンドポイントにおける多様性

FSPの代表的論者のひとりであるハーディングも、科学の多様性が科学的知識の生産に貢献すると論じている。だが、彼女が意図する多様性とは、社会の中の「あらゆるグループの人々が単に物理的に存在しているという多様性 ([diversity] of mere physical presence) ではなく」(Harding 2015, xi)。¹⁾ハーディング自身は明確には述べていないものの、先のロンジーノにおける多様性は、「単なる物理的存在の多様性」の一例とも考えられる。

FSPとEEとは、科学的推論や科学方法論そのものの再考から科学におけるフェミニズムを捉えるというモチベーションを共有し、その延長線上で科学の価値自由理念を否定し科学的知識の文脈依存性を主張する点も一致している。しかし、多様性の捉え方については、FSP側によって、EEへの批判的指摘とともに両者の相違が強調されてきた。クリスティン・インテマンは、EEが、共同体内部に存在するすべての観点や価値、利害関心に等しい割合の認知的利益を認めてしまうことを問題視している。それゆえに、EEは、女性やマイノリティの人々の経験に基づく証拠理解に他の人々のそれよりも特権性を与えられず、また、差別主義的な価値観や疑似科学的な観点にもそれが共同体内部に存在することじたいに潜在的な認知的有益性が

あると認めてしまっているのではないか (Intemann 2010a, 220; 2010b, 791-792; 2017, 137)。

では、ESP が想定する多様性とはどのようなものか。まず知識形成に関する ESP の見解をみてから整理していく。ESP 論者が共有するコアな主張のひとつに、個人々が経験し理解しうるものがらば、かれらの社会的位置 (social location) に状況づけられているとする「状況づけられた知識 (situated knowledge)」がある。個人々が社会の中でおかれた立場の違い (支配層か被支配層か、階級・職業・性別・役割等の相違のほか物質的な生活環境の相違なども含む) は、人々に異なる経験をもたらす。経験の相違は、何を経験的証拠として理解するか、どのような経験的証拠にアクセスしやすいかの相違も生む (Intemann 2010b, 784)。だから、「人々の社会的位置は、かれらが何を知らるかを形作り限界づける」(Wylie 2003, 31)。

人々の社会的位置は、そこから特定領域の知識を形成し生産する立場としての「スタンドポイント (standpoint)」を形成しうる。ESP は、女性やマイノリティといった周縁的なグループのスタンドポイントは、他のグループよりも認知的により優れており特権性を持つと主張する。ただし、何らかの社会的位置にあることが、自動的に特権的なスタンドポイントの形成を可能にするわけではない。一九八〇年代の初期 ESP は、ある社会的位置 (たとえば女性) にある人々はみな、何らかの普遍的な性質 (たとえば女性らしい知り方) を本来的に共有しているという本質主義を採っていると批判された。だが、アリソン・ワイリーはこれを明確に否定している。ESP は「スタンドポイントを特徴づける社会的カテゴリや集団について本質主義的定義を前提してはならない」。また、「特定のスタンドポイントを占めている人々が、彼らのおかれた社会的位置、政治的位置のみを理由に、自動的により多くのことを知っていたり、よりよく知っていたりすると主張することはできない」(Wylie 2003, 28)。

現在のESP論者は、スタンドポイントとは意識的かつ集团的に獲得されるものであり、単になんらかの社会的位置にあることは区別されると強調している。^③ スタンドポイントとは、「階級的社会構造の機能の仕方についての独特の洞察」(Harding 2004, 31) あるいは「われわれの社会的位置の性質と、それが認知的にもたらす相違についての批判的意識である」(Wylie 2003, 31)。たとえば、ジェンダー的にあるいは人種的に非主流な社会的位置にある科学者たちは、自分たちの成果が主流の科学者の成果よりも関心をもたれず評価されにくいという経験を持つかもしれない。あるいは、被支配層などの周縁的な社会的位置にある人々は、その帰結がかれらの生活に直接かわる科学的知識の生産の場からの排除を経験してきたかもしれない。かれらの経験は、自身が置かれている社会的位置がかれらの認知的環境に与えている影響を意識させ、社会条件を変化させる必要の批判的気づきと知識生産への参与のモチベーションをもたらしうる。このような社会的条件の変革という目的を意識的に共有する人々による知識生産の集团的試みが、スタンドポイントの具現化であるとされる。

したがって、周縁的グループの人々の「認知的特権性」は、かれらが上のようなスタンドポイントを形成する限りで発揮される。また、周縁的グループの人々に特権性を認めるのは、かれらが、社会的支配層グループの人々によってこれまで無視されるか無意識に回避されてきた社会的・自然的世界の側面を検知しやすいとか、支配層グループには所持しえないそれら側面への解釈的発見法や経験的証拠へのアクセスを持っていることによる (Wylie 2012, 12, Intemann 2010b, 791)。^④

ただし、ワイリーは、人々のどのような経験が認知的に有益なスタンドポイントを形成しうるかは「開かれた(経験的な)問題」であり、その特権性は、あるローカルな領域において発揮されるもので、あらゆる

研究領域、トピックに普遍的なわけではないとも強調している (Wylie 2012, 12)。

上のようなスタンドポイント理解は、男性主義的な諸価値が排除されるべきならば、フェミニニズムの諸価値はなぜ重視できるのかというバイアスパラドクスに対するFSPの解答にもなる。階級や支配、差別の構造における支配層にあるという社会的立場からの知識生産は、被支配層の社会的立場にある人々が経験する社会・自然的世界の部分をつまらぬ、あるいは敢えて捉えないという点で、それら部分の真理の達成にとって妨げとなる。つまり、ステイールの言葉遣いでいえば、支配層の社会的立場やそれへのコミットメントは、非認知的でありうる。だが、階級、支配、差別構造における被支配層という社会的立場やそれへのコミットメントは、妨げられている部分の真理の達成に貢献しうるスタンドポイントを形成しやすい。その意味で、支配層のものよりも、より認知的に有益でありうる。要するに、これまで男性が支配的・代表的、女性が被支配的・周縁的であるような構造下にあった領域に関連する知識探究に限定してのことではあるが、FSPは、フェミニニズムの諸価値は認知的により重要なものとして直接的に擁護し、男性主義的な諸価値はそれらが非認知的でありうることを理由に拒絶できる。

ここまでの議論から、FSPにとっての多様性は、FEのものとかかなり異なることがわかる。インテマンは、FEとFSPの相違について度々論じているが、両者の大きな相違は「客観性のために必要である多様性の種類 (the kind of diversity)」および「認知的共同体内部の多様性が、客観性または認知的有益性に貢献する理由」にあるとする⁽⁵⁾。FEは、「自身のものとは異なる諸価値や利害関心が科学的推論に影響しているときに、その影響を同定しやすい」から、「多様な価値、利害関心 (diverse values and interests) を持つ個人々から構成される科学的共同体を擁護する」。それに対し、「FSPは (価値や利害関心の多様性ではなく) 社会的位

置の多様性 (*diversity of social position*) が認知的に有益であるとする」。(Inteman 2010b, 790 強調はすべて原文)。

多様性の「種類」という表現が適切かは微妙だが、少なくとも両者の「種類」の相違として、FEは異なる「価値や利害関心」が多く含まれることを求め、ESPは異なる「社会的位置」が多く含まれることを求めるという理解は誤っている。ESPは、科学的共同体内部に、互いに異なる社会的位置が、より数多く含まれることは求めていないだろうからである。かれらにとって多様性が実現した状態とは、科学共同体内部に被支配層の人々による認知的に有益なスタンドポイントが形成されている状態、あるいは、認知的に有益なスタンドポイントを形成しうる社会的位置にある人々が包摂されている状態であろう。ESPは、多様性を、あるグループ内部に、その内容は問わず数的に多くの異なる様々なものが含まれた状態として捉えているのではない。ESPは、多様性を実現するためにグループ内部に包摂されるべき対象を、トピック相対的ではないが具体的に規定しており、そのような対象を含むことを多様性のある状態としている。次節では、この点を、ステイラーによる複数の多様性概念モデルを参照しつつ、より明確にする。

4. 複数の多様性概念とフェミニズム科学哲学における多様性

ステイラーらは、近年の科学哲学上での多様性に関する議論は、多様性の文脈 (*context of diversity*) ばかりが焦点化され、より根本的な多様性概念 (*concept of diversity*) には注意がなされていないと指摘している。多様性の文脈とは、多様性を評価したい文脈 (企業、科学者共同体、新入生、地域、自然環境など)

と多様性評価のさいの文脈内部の属性（出身地、年齢、ジェンダー、スキル、価値観、発見法、生物種など）を指す。多様性概念とは、どのような構造や状態を多様性があると評価するかの概念で、これじたいは貫文脈的である（Steel et al. 2018, 761-762）。

ステイラーらは、生態学や人口動態学における多様性概念を参照し、一般的な2タイプの多様性概念区分と、特殊な3つの異なる多様性概念モデルを提示している。ステイラーらによる区分を見たのちに、FEおよびESPの立場に適用する。

4-1. 複数の多様性概念

まず、一般的区分として、グループ内部的（within group）／比較参照的（comparative）多様性とが分けられる。グループ内部的多様性は、多様性を評価する対象となるグループ内部の属性分布のみで決定される多様性である。比較参照的多様性は、評価対象のグループ外部にある参照集団との比較参照に依存して決定される多様性である（Steel et al. 2018, 763）。

そのうえで、異なる特殊な概念モデルとして以下の3つが分けられる。いま、多様性が評価されるグループをG、属性のラベルをA、属性を細分化する互いに排他的なカテゴリを \mathbb{P} とする。また、Gとは別の参照集団（reference population）をPとする。

- 平等主義的多様性（egalitarian diversity）：グループ内部的多様性。属性 $A = \{a_1, \dots, a_n\}$ にたいするGの分布が一様であるとき多様性がある。Gのすべての要素がひとつのカテゴリに集中するとき多様性は

最小、すべてのカテゴリに同割合の分布があるときに多様性は最大となる。また、カテゴリ数が多いほど多様性は大きい。(Steel et al. 2018, 764)

- 代表的多様性 (representative diversity) : 比較参照的多様性。G 以外のある集団 P を参照集団としたうえで、G における属性 A の分布が、P における属性 A の分布と一致しているか類似しているときに多様性がある。(Steel et al. 2018, 767)

- 規範的多様性 (normic diversity) : 比較参照的多様性。参照集団 P において想定される「非多様 non-diverse」である属性カテゴリ and に対する多様性である。and は P におけるカテゴリ間の数的割合や社会的ステータスの分配状況などを反映して決定される。G の多様性は、G がどれだけ and から離れているかによって評価される。G のより少数の要素が and であるほど多様性は大きい。(Steel et al. 2018, 768)

平等的多様性は、人口動態学などで一般的に想定されている概念である。代表的多様性は、より大きな集団の分布を代表する小グループを作成したい場合、たとえば、ある地域の政策課題審議のためのミニパブリックグループの作成などで用いられる。規範的多様性は、保全生態学などで提起されてきた多様性概念の一つと類似している。特定地域 G の種分布と、より広い地域 P の種分布とを比較して、G が P においては希少な種をより多く持つ場合（つまり、P における非多様な種をより少なくもつ場合）に G の生物多様性が大きいとする場合などである (Steel et al. 2018, 765-766)。

他の概念と比較して、規範的多様性が特徴的なのは、ある G の全要素が同一カテゴリに属していても、G が多様でありうる点、そして、G 内のひとつの要素（人物）を非多様ではないというみで「多様」であると評価できる点である (Steel et al. 2018, 768)。たとえば、工学系研究者・学生全体を参照集団 P、属性を

ジェンダー、Pにおける非多様カテゴリを数的多数派である「男性」とした場合、一人の女性の工学系研究者は多様であるし、女子大学の工学部は、そのグループの全員が女性という単一カテゴリに属していたとしても多様性のあるグループであるといえる。なお、参照集団における非多様なカテゴリの決定は、参照集団における事実的な数的分布のみによって決定されるわけではない。たとえば、人口比率では女性が男性を上回る家父長制社会を参照集団とした場合、人口比率でいえば女性が非多様となるが、歴史的な社会的ステータスの配分状況を考慮すると男性が非多様とみなせる。

同一グループの同じ属性を問題にしても、どの多様性概念を採用するかによって、グループが多様性を持つか否かの評価は異なる。また、比較参照的多様性の場合には、参照集団の変更によっても評価が変化しうる。

4-2. EE、FSPの適用

上の概念区分を、EEとFSPの立場に適用してみる。

まず、EEにおける価値観、利害関心などの個々人の観点の多様性の議論は、平等主義的多様性概念を想定したものとして解釈可能であろう。多様性が評価されるグループを科学者共同体、属性を価値観とか利害関心といった個々人がもつ観点とする。科学者共同体内部のメンバーが、具体的な価値観の内容（男性主義、フェミニズムなど）としてのカテゴリに、より一様に属しているほど多様性が大きい。すべてのカテゴリに同数ずつのメンバーが属しているとき、つまり、異なる価値観内容を持つメンバーが同数ずつ含まれているとき多様性は最大となる。なお、カテゴリが多いほど、つまり、共同体内部に存在する具体的価値観の内容

の数がより多いほど、科学者共同体の多様性は高いことになる。

なお、先にも触れたロンジーノによる科学者共同体の4つのノルム、とくに「調整された平等」の主張を考えると、彼女は、代表的多様性を意識的に避けて平等主義的多様性を採用しているとも解釈できる。つまり、より大きな社会集団における価値や利害関心の分布を科学者共同体に代表すると、男性的な観点や先進国の人々の観点到大きく偏るので、社会の中の周縁的な人々の観点としてのカテゴリも含めて、カテゴリごとの比率を平等に「調整する」ということである。

次に、FSPの側はどうか。ステイールらは、インテマンによるFEとFSPとの多様性の「種類」の相違という表現 (Intemann 2010b, 790) は、いっけん同一の多様性概念のもとでの属性の相違(価値観か社会的位置か)を連想させるが、彼女の議論を見る限り、FEは平等主義的多様性と、FSPは規範的多様性と整合的であると指摘している (Steel et al. 2018, 772,f.8)。その通り、FSPは、FEとは異なり、規範的多様性概念を採用していると理解するのが適切であろう。

ハーディングは、科学的共同体内部に有益な多様性を作るには、これまで科学に参入してこなかった人々の積極的な包摂、いわゆる「アフターマティブアクション」によって科学内部に「オルタナティブなグループ」を作ることが得策だとする (Harding 2015, 35)。インテマンも、FSPにとって重要なのは、特定の状況やトピックに関連して「歴史的に非代表的であった社会的グループを代表する」人々の科学的議論への参与であると述べている (Intemann 2010b, 792)。

FSPの立場を、ステイールらの概念区分に適用して述べなおせば以下のようになる。まず、FSPは、従来の・歴史的な科学者共同体を参照集団とし、歴史的に科学において支配的であった社会的位置にある人々、

具体的には、男性とかアングロサクソン系の人々、先進国の人々などを非多様な属性カテゴリと決定する。そして、そのような非多様な属性カテゴリを含まないか、より少なく含むような意味での多様性、すなわち「規範的多様性」を持つグループを、科学者共同体内部に作ることを目指す。このようなグループこそが、認知的に有益な「スタンドポイント」である。

なお、規範的多様性についての先の議論では、参照集団に対して非多様ではないカテゴリに属していれば、個人であっても多様性が認められる。すると、被支配的な社会的位置に属していればそれだけで、ひとりであっても規範的多様性が認められることになる。だが、この点は、ESPは否定するかもしれない。スタンドポイントは単にある社会的位置にあることと同じではなく、また、意識的・集团的に獲得されるものであるからである。

5. 結び

ここまで、フェミニスト経験主義 (FE) とフェミニストスタンドポイント (FSP) について、それらが依拠する多様性概念の相違を明らかにしてきた。FEは、観点の平等主義的多様性をもつ科学的共同体を求める。平等主義的多様性は、多様な観点からの相互批判によって、偏見や諸価値の悪影響が最小化され、より客観的な科学的仮説の受容が可能になるというみで認知的有益性を持つ。FSPは、科学的共同体の内部に、従来の科学的共同体を参照集団とした場合の規範的多様性を持つサブグループを作ることを目指す。規範的多様性を持つグループ、つまり、これまで科学において非代表的であった社会的位置の人々が形成するスタンドポイントは、これまで無視されてきた世界の側面やアクセスされなかった証拠の入手を可能にするた

めに認知的に有益である。

両者の間で依拠する多様性概念そのものが異なることは、FE、FSの論者自身によってはこれまで明確に捉えられてこなかったと思われる。そのため、両者の相違が理解しにくいだけではなく、折衷の可否についても十分に検討しにくかった。詳細な議論は他の機会に譲るが、学科領域やトピック相対的のどのような多様性を重視するかを選択することで、FEとFSPのアイデアを組み合わせることは可能かもしれない。また、それぞれの多様性概念の明確化は、FE、FSPの理論的主張の経験的テストのためにも役立つだろう。

注

- (1) フェミニスト科学哲学の発展史、その内部での複数路線については他で論じたので本稿では可能な限り省略する。(cf. 二瓶 2020, 2021)
- (2) この区分は、仮説受容のさいの帰納的リスクに関する議論上で提起された。(Steel 2010)
- (3) クラスノウは、この点を「状況づけられた知識」「認知的特権性」と並ぶ、FSPの第三のテーゼ「達成 achievement」と括弧している(Crasnow 2013, 418)。
- (4) 支配層よりも被支配層のスタンダードポイントが優れているとする点は「反転 inversion」テーゼとも呼ばれる(Wylie 2012)。
- (5) インテマンは、FEの経験主義的方法論に、FSPの多様性概念を結合した「フェミニストスタンダードポイント経験主義」が望ましいと結論づけているが(Intemann 2010a, 2010b)、両者の折衷の可否、是非は本稿では議論しない。

文献

- Anderson [2004], "Uses of Value Judgments in Science: A General Argument, with Lessons from a Case Study of Feminist

- Research on Divorce", *Hypatia*, 19(1), 1-24.
- Antony [1994], "Quine as Feminist: The Radical Import of Naturalized Epistemology", Reprinted in Nelson, H. and Nelson [2003], *Feminist Interpretations of W. V. Quine*, Pennsylvania state University Press, 95-149.
- Crasnow [2013], "Feminist Philosophy of science: Values and objectivity", *Philosophy Compass* 8(4), 413-423.
- Harding [1986], *The Science Question in Feminism*, Cornell University Press.
- Harding[2004], "A Socially Relevant Philosophy of Science? Resources from Standpoint Theory's Controversiality", *Hypatia*, 19(1), 24-47.
- Harding [2015], *Objectivity & Diversity Another Logic of Scientific Research*, The University of Chicago Press.
- Hong and Page [2004], "Groups of diverse problem solvers can outperform groups of high-ability problem solvers", *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 101(46), 16385-16389.
- Intemann [2010a], "Feminist Standpoint Empiricism: Rethinking the Terrain in Feminist Philosophy of Science" in Magnus, P. D. and Bush, J. (eds.) [2010], *New Waves in Philosophy of Science*, Palgrave Macmillan, 199-225.
- Intemann [2010b], "25 Years of Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Where Are We Now?", *Hypatia*, 25(4), 778-796.
- Intemann[2017], "Feminism, Values, and the Bias Paradox", in Elliott, K. C. & Steel, D. (eds.) [2017], *Current Controversies in Values and Science*, Routledge, 130-144.
- Kitcher [1992], "The Division of Cognitive Labor", *Philosophy of Science*, 32(2), 259-300.
- Kitcher [1993], *The Advancement of Science: Science without Legend, Objectivity without Illusions*, Oxford University Press.
- Kourany [2010] *Philosophy of Science after Feminism*, Oxford University Press.
- Longino [1990], *Science as Social Knowledge*, Princeton: Princeton University Press.
- Longino [2002], *The Fate of Knowledge*, Princeton: Princeton University Press.
- Rolin [2006], "The Bias Paradox in Feminist Standpoint Epistemology", *Episteme*, 3(1-2), 125-136.
- Solomon [2001], *Social Empiricism*, Cambridge: MIT Press.
- Steel [2010], "Epistemic Values and the Argument from Inductive Risk", *Philosophy of Science*, 77,14-34.
- Steel, Fazelpour, Gillette, Crewe and Burgess [2018], "Multiple diversity concepts and their ethical-epistemic implications", *European Journal for Philosophy of Science*, 8, 761-780.
- Weisberg [2010], "New Approaches to the Division of Cognitive Labor", in Magnus and Bush (eds.) [2010], *New Waves in Philosophy of Science*, Palgrave Macmillan, 250-269.

- Weisberg and Muldoon[2009], "Epistemic Landscapes and the Division of Cognitive Labor", *Philosophy of Science*, 76(2), 225-252.
 - Wylie [2003], "Why Standpoint Matters", in Figueroa and Harding(eds.) [2003], *Science and Other Cultures: Issues in Philosophy of Science and Technology*, Routledge, 26-48.
 - Wylie [2012], "Feminist Philosophy of Science: Standpoint Matters", *the Proceedings and Addresses of the American Philosophy Association*, 86(2), <https://philpapers.org/archive/WYLFPO-2.pdf> (参照2021/7/25)
 - Zollman [2010], "The Epistemic Benefits of Transient Diversity", *Erkenntnis*, 72, 17-35.
 - 二瓶真理子 [2020] 「フェミニスト経験主義における事実・価値ホーリズムの批判的検討」『東北哲学会年報』 36, 15-28.
 - 二瓶真理子 [2021] 「(研究ノート) 科学における価値と客観性に対するフェミニスト科学哲学のアプローチ」フェミニスト経験主義とフェミニストスタンダードポイントの展開」『松山大学論集』 33(1), 91-111.
- * 本稿は JSPS 科研費 19K13047 の助成を受けた研究成果の一部です。

(こい まりこ・松山大学経済学部)